

歯質欠損・部分歯列欠損・無歯顎に対して補綴治療を選択するに当たり、術者は初めに症型分類を行います。

症型分類とは、補綴治療の対象となる疾患・障害の病態を評価するもので、部分歯列欠損の症例においては、咬合支持・欠損様式・補綴空隙・残存歯列と周囲組織の状況・欠損部顎堤形態を診査項目として、治療の難易度を分類し、そして術者の技量を加味しながら適切な治療方針を決定していきます。

上顎前歯部における少数歯欠損症例をこの分類に当てはめると、比較的やさしい症例となります。しかしながら、審美性を強く求められるケースにおいては、決してやさしい症例ではなく、むしろ高度なテクニックを必要とする難しい症例へと変貌し、トラブルに発展するケースも少なくありません。

そこで本書では、「一見簡単そうで、実は難しい」上顎前歯部の少数歯欠損症例にフォーカスを絞り、これまで経験してきた症例を紹介します。

本書の特徴は、前歯部の欠損症例に応用される固定性ブリッジ、インプラント、そして接着性ブリッジといった各種の補綴治療オプションと、それに伴う補綴前処置の付加的手技を重みづけ（点数化）することにより、経験の浅い先生でも症例の難易度を簡便に把握できるようにしました。

また、実際に治療するに当たっては術者の技量が必要となるため、その技量を評価する「自己チェックリスト」を作成し、個々人の技術レベルに合わせた治療計画をデザインできるように構成しました。

さらに、最後の7章では、理論では解決できない前歯部欠損補綴の光と影の部分、を少しでも読み取っていただくために、筆者らが直面した予後不良な症例も収載しました。

日常臨床で困ったときに、本書の知見が先生方のお役に立てば幸いです。

東京都開業／神奈川歯科大学 客員教授 小川勝久  
神奈川歯科大学大学院歯学研究科 咀嚼機能制御補綴学講座 教授 木本克彦

